手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報
2019 年 3 月 31 日
第 40 号

# 手賀沼が海だったころ

## 松ヶ崎城跡の見方の変遷、謎と発見

会長　森　伸之

### 1. 松ヶ崎城跡の性格に関する見方の変遷

松ヶ崎城跡は、戦国時代には手賀沼が台地下のすぐ近い所にまで迫った岬状の台地先端にあって、手賀沼の水運を監視できる交通の要衝にあったことは、よく知られています。

松ヶ崎城跡が中世の城郭であることは地元では古くから知られていたと思われますが、昭和 49 年(1974)に佐藤立身氏が「柏の文化財と自然を守る会」の会報『郷土と自然 25 号』に松ヶ崎城跡を取り上げたのが、研究の取っ掛かりになったようです。

昭和 55 年(1980)に刊行された『日本城郭史大系6 千葉・神奈川』(新人物往来社)にある松ヶ崎城跡の項には、「広大な集水面積を有し、手賀沼の西端部へ流入する大堀川の二本の支流が、根戸・呼塚の地点で合流する。松ヶ崎城は、その合流地点に挟まれて、西から東へと突き出た標高二〇mの舌状台地の突端部にある。

この城は昭和五十二年頃、北側周辺に団地が造成されるに及んで、新設道路が計画され、この時の調査で単郭の遺構が確認された。

郭は方形をなして土塁と空堀をめぐらし、南側に腰郭が残っている。　また空堀利用(おそらく井戸への道であろう)通路もよく残っている。

城主に関しては、まったく不明である。」と書かれています。

その後、研究者や柏市教育委員会などにより、調査研究が進み、松ヶ崎城跡の性格が徐々に明らかになってきました。

森田洋平氏は「匝瑳氏の動向」『我孫子市史研究7』(1983)のなかで、松ヶ崎城を戦国時代柏市高田にいた豪族匝瑳氏の築城とし、柏市教育委員会は柏市の遺跡分布調査の中で松ヶ崎城跡について報告しています。

さらに、平成 9 年(1997)に刊行された『柏市史　原始・古代・中世編』の執筆者である佐脇敬一郎氏は松ヶ崎城を手賀沼沿岸の「水辺の城」と位置づけ、松ヶ崎城を「水辺の城」と位置付け、水運との関わりに言及し、千葉県も調査報告書を出しました。平成 7 年(1995)の『千葉県所在中世城館跡詳細分布報告書Ⅰ』で石田守一氏は松ヶ崎城跡の縄張り図を提示しました。

平成 11 年(1999)に松ヶ崎城のシンポジウムを開催した市民有志が当会を結成、以降当会は書籍『手賀沼が海だった頃』、ビデオ『柏の歴史遺産　松ヶ崎城址』、DVD『柏の歴史遺産　松ヶ崎城跡』等を制作、紹介しています。

平成 14 年(2002)6月に当会は柏市長に保存の要請書を提出。「松ヶ崎城址及び周辺森林の保存のお願い」も、平成 15 年(2003)2月には柏市議会に請願し、採択されています。

一方、柏市教育委員会は平成 14 年、平成 15 年の2回の発掘確認調査を行い、その結果を受け、松ヶ崎城跡は「手賀沼沿岸、柏北域の法華坊、中馬場遺跡、根戸城などとあわせて中世を探るカギとなる遺跡」として、平成 16 年(2004)7月に柏市指定文化財となりました。

当初松ヶ崎城は 16 世紀、天正期くらいの城と考えられてきましたが、そうした調査により、実際は戦国初期の城跡と判明しました。

＜以前の松ヶ崎城跡(門跡)＞

### 2. 発掘調査からの発見

かつて、松ヶ崎城は未完成の城、戦乱を避けて村人が逃げ込むための城、あるいは合戦のための臨時の城ではないかなどと言われてきました。　しかし、城域が約300m四方と広く、発掘を含めて城の遺構を調査するなかで、城としては完成してい

たことが分かりました。　また堀と土塁、物見台、三つある虎口のうち東側虎口には門の遺構もともない、東南から北にかけての台地中段には複数の腰郭をもつといった本格的な城の構造を持っていることから、戦国時代初期の構造ながらプロの作事であり、豪族が築いた城といえると思います。

平成 14 年(2002)～15 年(2003)の柏市教育委員会の発掘調査によれば、「ほぼ正方形に近い第Ⅰ郭とその南と西にL字形にとりまく第Ⅱ郭の二つで形成される主郭は、台地端の自然地形に沿った形の南側を除き、約 50m四方の方形に近い形で東西と北に土塁と堀で囲み、南にも土塁痕が残る。　第Ⅰ郭の南側に、第Ⅰ郭より約 0.8m高い第Ⅱ郭があり、台地の縁辺に土塁が残る」とあります。

第Ⅰ郭と第Ⅱ郭の間の土塁はあくまで仕切り土塁として後付けされたもののようで、郭は築城当時は1つだった可能性が高いと考えられます。　主郭の内側第Ⅰ郭が周囲より低い特異な構造は、佐倉市の井野城など数箇所の城跡と同じです。これは郭内での貯蔵のための構造とも考えられます。ただ約 300m四方の広さがありますので、合戦時には数百の兵が駐屯できる場所でもあったと思います。

松ヶ崎城には、横矢掛りや土塁の折歪みなど、戦国後期の特徴はなく、作事上の工夫といえば、西側の食い違い虎口のみで、16 世紀前半までの城であることが構造面からも分かります。

＜門跡＞
画像は柏市教育委員会

虎口は西側と南側にあるほか、東側の物見台として使用された古墳（第1号墳）と隣の第二号墳の間には門跡が発掘で検出され、東側土塁の切れ目横に硬化面があり、東側土塁と物見台の間も虎口の機能を果たしていたと考えられます。　東側の虎口は、門の遺構を伴い、特に重要視されていて、北側低地にあったとされる船着場の存在を意識させるものです。　門跡は二個一対の柱穴とその間の 110cm ほどの硬化面、すなわち通路状遺構を伴うもので、この検出は画期的でした。

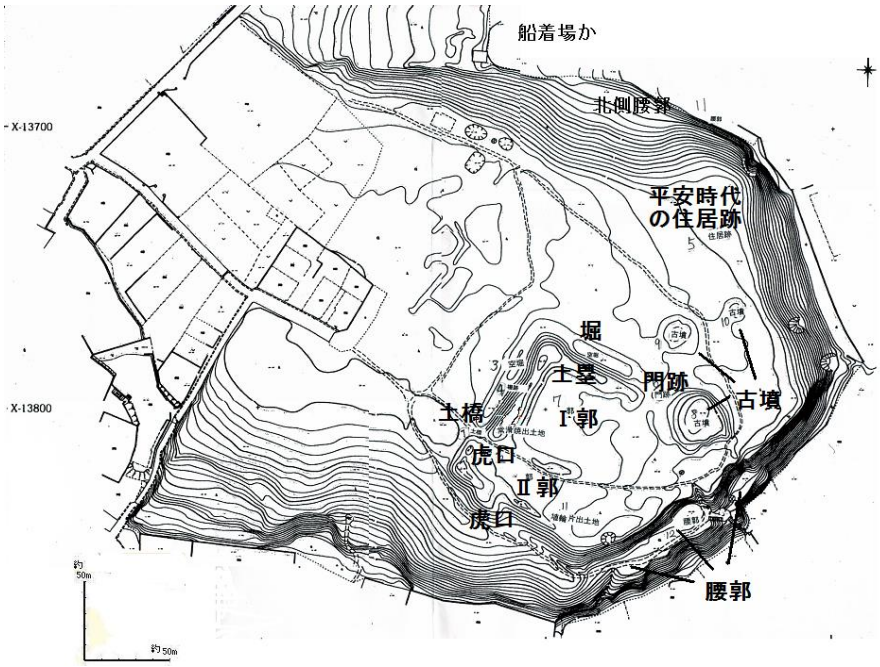
東側の物見台として使用された古墳（第1号墳）の東には、周溝を掘りなおしたとみられる箱堀状の堀が発掘で見つかっており、東側虎口は、その堀と東側土塁手前の堀とで挟まれた場所にありました。

北側の比較的緩やかな台地斜面には、逆茂木か柵跡とみられるピット群が、発掘調査の折に検出され、北側腰郭からは柱の穴が見つかっています。　北側の斜面をのぼり城の中心部分に向かうと、門の手前に古墳（第 2 号墳）があり、これを避けて東側の土塁手前の堀と物見台すなわち第1号墳の周辺にあった周溝を掘りなおした堀の間の狭い土橋状の通路を通ると二つの柱穴を伴う門（冠木門か）をくぐり、東側虎口から主郭に入る形になります。　ちなみに門跡の発掘結果からは二本の柱の穴は 25cmから 35cmほどでそれほど深くなく、地業からみて扉は主郭の外側から内側に開くタイプであったようです。　門があるということは東側虎口が大手であり、この門に至る北側腰郭からの通路の先は、手賀沼で囲まれた松ヶ崎城の地形を考えれば、やはり船で、手賀沼を利用した往来ということになります。　実際、北側腰郭の近くに船着場があったという伝承もあります。

一方、松ヶ崎城跡から発見された遺物については、古代の土器片などは多いものの、中世のものはかわらけや擂鉢、内耳土鍋など少数です。なお、内耳土鍋は煮炊き用です。

＜松ヶ崎城跡中世遺物＞
画像は柏市教育委員会

つまり館のように領主や家来たちが常にいた場所ではなく、手賀沼の往来の監視や物資の管理などのために守備兵程度が常駐し、合戦時には兵たちの駐屯地にもなった城と思われます。




＜城跡の概念図:平成 14 年柏市発掘資料より、大きな文字は筆者が付記＞

## 3. 残された謎

松ヶ崎城跡について、戦国時代はじめに築かれ、手賀沼の水運を監視し、水陸交通の要衝をおさえるといった、築城時期や目的などは、分かってきましたが、いまだに築城者や周辺の城館との関連などは分かっていません。

前出の森田洋平氏は松ヶ崎城の築城者を匝瑳氏と推測しましたが、文書などでの裏付けはありません。 一方松ヶ崎城跡の発掘にも従事した間宮正光氏は、松ヶ崎城を享徳の乱頃の陣城とする考察をしています。 陣城であれば、地元の豪族が築いたというよりは対立する勢力のどちらかが築いたことになります。 つまり享徳の乱当時に古河公方、下総千葉氏と対立していた関東管領上杉氏の陣営が想定されますが、その場合でも手賀沼沿岸に一つだけ陣城を構えた訳ではないでしょう。

手賀沼周辺、手賀沼水系の別の城、例えば柏市高田の高田城、我孫子市根戸の根戸城、北柏駅近くにあった御蔵屋敷といった、松ヶ崎城跡にほど近い城との関連はどうなのかという疑問が残ります。

もっとも築城者、城主、近隣の城との関連がわかっている中世城郭は、千葉県内あるいは全国的にもそれほど多くはないと思います。築城者が伝承では有名な武将になっているケースもあり、変な先入観がない方が良いかもしれません。

いずれにしても、地域史研究や文化財保護には終わりはないと思います。 幸いにして、松ヶ崎城跡は 500 年の時代を経て、今日の我々の前にあります。

＜御蔵屋敷跡（跨線橋の先＞

自然や文化財を守り、残された謎を解いていくのが、歴史的遺産を引き継いだ者の責務でありましょう。

＜松ヶ崎城跡の河津桜＞

# 総会、講演会ほか今後の予定

## ● 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 2019 年度総会

・日時
2019 年 4 月 29 日（祝・月）10 時 30 分～11 時 30 分
・場所
アミュゼ柏　4F　音楽室
・内容
2018 年度事業報告、2019 年度事業計画、予算等
・その他
事後、3F　料理実習室で食事・休憩

## ● 手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 講演会「柏飛行場と航空部隊」

（後援：柏市教育委員会）

・日時
2019 年 4 月 29 日（祝・月）13 時 30 分開場
14 時～16 時
・場所
アミュゼ柏　1F　プラザ
・内容
テーマ「柏飛行場と航空部隊」
講師：森　伸之　（軍事史学会会員）
司会：富澤　美奈子

・参加費：500 円（資料代など）
・その他：申込不要。
ご来場の方に関連冊子を進呈します。
駅から近いのでなるべく電車などでお越しください。
（駐車場は周辺の有料駐車場をご利用願います）
会場で陸軍航空学校参考書、戦跡パネルなどの資料や松ヶ崎城跡の桜の写真の展示あり

## 当面、柏中央公民館の代わりにアミュゼ柏等を利用

柏市教育福祉会館（中央公民館）が「施設の耐震補強及び時代に即した学習施設となるよう」、大規模改修工事のために、平成 31 年 4 月 1 日～平成 32 年 12 月までの 1 年 9 ヶ月、休館となります。

当会は講演会、歴楽講座や会議などで、柏中央公民館を長年使ってきました。
代替施設を求める動きもあり、この 3 月には柏中央公民館の代替施設確保の具体化について、「大手予備校旧校舎の借用を検討してください」との請願も柏市議会で採択されましたが、足元の活動場所を確保しなくてはなりません。　当会としては既に地域史を語る会以降アミュゼ柏（中央近隣センター）には 15 年以上登録、利用していますし、パレット柏も利用していますので、歴楽講座や会議についてはアミュゼ柏、パレット柏を引き続き利用していきます。
講演会などホール行事についても、アミュゼ柏を中心に考えようと思います。

## ● 柏市民活動フェスタ 2019 当会は以下の通り参加

・日時
2019 年 5 月 12 日（日）
15 時半～17 時半
・場所
ﾊﾟﾚｯﾄ柏　ﾐｰﾃｨﾝｸﾞﾙｰﾑ D
・内容　講座「柏周辺の戦国史」

## ● カシニワ・フェスタ 2019 で松ヶ崎城跡見学会

・日時
2019 年 5 月 19 日（日）
13 時半～15 時半
・場所
松ヶ崎城跡
・帽子をかぶり、歩きやすい服装でお願いします

＜前回の松ヶ崎城跡見学会＞

## 郷土史の窓

# 千葉氏と千葉・東葛(2)

### ◆千葉六党

千葉氏の武士団は常胤の代に生まれた千葉六党を基盤とし、胤正―成胤の本宗を中心に下総地方の一族などを含めて形成された。 この体制は、鎌倉時代から戦国期まで続いた。

| 六党 | 始祖 | 備考 |
|---|---|---|
| 千葉氏 | 太郎胤正 | 千葉常胤の嫡男。下総の千葉庄、千田庄、九州肥前小城などを伝領し、上総にも勢力を広げた。千葉氏の本宗。 |
| 相馬氏 | 次郎師常 | 千葉常胤の次男。相馬御厨を継承し、奥州行方郡などを領した。後に奥州と下総に分立。 |
| 武石氏 | 三郎胤盛 | 千葉常胤の三男。武石郷を本拠とし、陸奥国宇多・伊具・亘理郡も領した。後に奥州亘理郡へ主流は移動。 |
| 大須賀氏 | 四郎胤信 | 千葉常胤の四男。元は多部田氏。上総系大須賀氏の所領であった大須賀保に入部し、陸奥岩城郡などを領した。 |
| 国分氏 | 五郎胤道 | 千葉常胤の五男。葛飾郡国分郷 → 香取郡大戸庄の地頭となり、周辺をおさめる |
| 東氏 | 六郎胤頼 | 千葉常胤の六男。香取郡立花庄（東庄）を本拠、木内庄、三崎庄なども領した。一族は、東葛の風早郷にも広がる。美濃東氏もこの東氏の流れ。 |

千葉常胤には７人の男子があり、嫡男は太郎胤正で、千葉介を継承して本宗となるとともに、下総だけでなく上総にも勢力をもった。胤正の後は、千葉介は成胤が継ぎ、連綿と続く。

次郎師常は下総国相馬郡の郡主となり、相馬御厨を領したが、後に相馬氏となり、子孫は主流が奥州へ出向き後に大名となるが、分立した下総相馬氏は守谷で局地勢力となった。 後述するように、その保有に苦労した相馬御厨は千葉氏にとって重要なものであり、その経営を引き継いだ師常も、嫡男に準ずる立場であったろう。

三郎胤盛は下総国千葉郡武石郷を伝領したが、子孫の主流は奥州亘理郡などに行き、亘理氏がうまれた。四郎胤信は香取郡大須賀を領し、戦国期まで続く。五郎胤通は下総国葛飾郡国分郷から後に香取郡大戸庄の地頭職となるなどして、勢力を香取郡に移し、香取郡矢作城などに拠った。 六郎胤頼は下総国香取郡東庄三郷を領し、東氏の一族は現在の松戸市や柏市に及ぶ風早郷、流山市の矢木郷にも展開、美濃に移動した東氏からは有名な東常縁が出た。

なお、常胤の子は、以上の六人以外に、僧となった律静房日胤がおり、日胤は近江園城寺にあって千葉氏へ様々な情報をもたらしたと考えられ、後に以仁王の挙兵に参加し討死している。千葉氏重臣の円城寺氏は、日胤の末裔を称したが、信じがたい。

千葉六党の所領のうち、千葉介が伝領した所領や相馬御厨以外の所領、大須賀、東（立花）などはかつて千田荘の藤原親政や親政に従った房総平氏一族、あるいは後に誅された上総介広常の一族の支配下にあったもので、頼朝によって討伐された者の旧領か、所有者が没落して闕所となった土地が与

えられたものか。

### ◆亥鼻城と周辺寺社

千葉氏の居城とされてきた城が亥鼻城であるが、この城が大治元年(1126)に常重が大椎から移ってきた当初に築城されたものであるかといえば、それは違うであろう。 亥鼻城は従来千葉城と呼ばれ、今もそう呼ぶ人がいる。 しかし千葉氏が拠ったのは当初は同時期の城館と同様、水際に造られた単純な居館であったのではないか。 南北朝期以降の館の一つは、現在千葉地裁の場所が比定されている千葉館であったのだろう。

すなわち千葉宗家が拠り、享徳 4 年(1455)3 月に古河公方に呼応して兵を挙げた原胤房によって攻められたのは、千葉館の可能性がある。 亥鼻城の遺構としては戦国時代のものがあり、永正 13 年(1516)、真名城の三上氏が扇谷上杉氏の求めに応じ、古河公方足利高基派の千葉氏家臣の原氏らが籠る、当城を攻撃したことが記録されている。よって、享徳 4 年(1455)以降まで使用されたことは間違いない。しかし、亥鼻城の築城時期、戦国期に誰が支配していたかなど、詳細は不明である。

亥鼻城跡は千葉の市街地の南から東にのびる台地上にあって、台地の端に位置する。亥鼻という別名は、地形が猪の鼻に似ていたからという説もあるが、「亥の端」で亥の方角に突き出た舌状台地の崖端という意味である。また台地の南側の千葉高校のあるあたりは、「葛城」という地名で呼ばれているが、これも城跡にちなんだものであろうか。

亥鼻城の北側に都川が流れ、天然の水堀の役割をはたし、西側は急な崖になっているほか、南には入りくんだ谷津があって、自然が作った大きな空堀としての役割を担っている。

＜都川と千葉館跡推定地＞

遺構としては、郷土資料館の北西にあたる幅約 50m、長さ 100m程の舌状となった台地端を取り巻くように土塁が見られる。そのうち、郷土資料館に近い、舌状となっている部分の基部にあり、舌状部分を仕切ろうとするように台地端のラインと直角になっている土塁は基底部が 5m 程はあり、高さも 3m 位ある。 但し、後世に破壊されたらしく、台地端に近い部分しか残っていない。 また台地端にある土塁の周辺には空堀も見られる。この郷土資料館北西部が第1郭で、郷土資料館のある場所に第 2 郭があった。この第1郭が主郭部である。第 1 郭と第 2 郭の仕切り土塁が、前述の郷土資料館に近くにある大きな土塁であろう。 かつて第 1 郭と第 2 郭の間には、空堀があり、土橋で結ばれていたが、仕切り土塁が残っているだけで、平坦に改変されている。 第1郭のさらに北西の台地先端には物見櫓があったと思われる物見台址があり、現在神明社が祀られている。

また、第 1 郭の土塁は、この堀切に下りる階段のところで切れており、ここが元々虎口であったと思われる。 堀切は、深さ約 5m、幅約 10m で現在コンクリート製の階段つきの道にされているが、北側は女坂という坂道となって、台地下へ続いている。 それも遺構の名残であり、女坂も堀底道であったのであろう。 台地下へ下りると、水の手であった「お茶の水」のある辺りへ出る。 西側の台地端、胤重寺の近くに下りる石段は、かつて池田坂と呼ばれ、亥鼻城の搦手に相当する間道であったが、その左脇にも土塁の残欠と空掘跡がある。なお、第 1 郭の土塁中から 13 世紀半ばの蔵骨器が出土している。

第 2 郭は現在の郷土資料館が建つ辺りであるが、この場所は郷土資料館が建つ前は、昭和 18 年(1943)に護国神社が建てられ、その際に土塁や堀が破壊された模様である。

実は、近年の発掘調査により、この郷土資料館の辺りには 14 世紀頃に掘立式の建物があったことが分かっている。 しかし、それは一町四方の豪族居館のような立派な建造物ではなく、また狛犬の破片が出土していることから神社であった可能性がある。

他に西側池田坂周辺の土

塁で囲まれた区画が第 3 郭で、郷土資料館の東側を含み、その南側文化会館のある辺りまでは第 4 郭であったという。 この文化会館の辺りの台地は南側に突き出し、まわりは急崖で谷津からの進入を防ぐ地形であり、重要な区画であったに違いない。 この第4郭までが、内郭部、実城に相当する部分である。

外郭部は、現在の千葉大医学部のある城の北側台地上から東側に展開していたらしい。 この場所も現在の千葉大敷地、あるいは住宅地や商店街となっているが、千葉大敷地の発掘では、堀などの遺構が検出された。また外郭部へは、南東側から谷津が入り込んでおり、自然の地形を利用した防備が考えられていたと思われる。

大手は、城主郭部の東南約 1km の中央博物館前のバス停付近にあったという。

主郭土塁から 13 世紀中葉の蔵骨器が発見されていることから、築城時期は 14 世紀以降の可能性大で、猪鼻山はそれ以前千葉氏に関連した墓地だったと思われる*。

*蔵骨器以外に貴重陶器（12 世紀中国製褐釉四耳壺）が発見され、千葉氏との関連が指摘された

＜千葉神社＞

＜第 1 郭、第 2 郭の間の土塁＞

なお、亥鼻城の周囲には、この城か千葉館を守るように寺社が建立されている。

城内には神明社があるが、外郭部である亥鼻の千葉大医学部周辺には北斗七星をかたどったという七天王塚がある。 しかし、七天王塚は単なる土塁の残欠という説もある。

鬼門の守りとしては曽場鷹神社があったが、明治期に貝塚町の大六天神社に合祀された。 裏鬼門は結城神明が守ったといい、神明社は今も残り、付近は神明町と呼ばれる。

千葉神社は、千葉介常胤の父大椎常重が、亥鼻城に入った際に、妙見神をここに祀り、北斗山尊光院金剛授寺を建立したのが起源といい、明治の神仏分離令により、仏教的要素が分離され千葉神社となった。

千葉神社の南の公園となっている土地には、昭和 20 年（1945）の空襲で焼けるまで、大日寺があった。大日寺は、大椎常重以降 16 代にわたる千葉氏歴代の墓所がある寺であるが、元は松戸市馬橋にあったものを当地に移した。 そして空襲で焼けてからは、千葉市稲毛区轟町の現在地に移動した。

ちなみに、千葉氏歴代の墓は千葉市稲毛区園生字石塔の千葉山にあったのが、大日寺に移されたとの伝承がある。 事実、千葉山には中世鎌倉時代の墳丘墓があり、1908 年に地元の小学校校長であった安川辰蔵によって発掘調査が行なわれたが、3 個の壺が発掘され、現存する 1 個については、鎌倉時代の古常滑焼の壺であることが確認されている。

＜大日寺の千葉氏歴代の墓＞

千葉寺は、和銅 2 年（709）に行基によって創建されたと伝えられる古い寺で、本堂横の龍蔵権現は、城の裏鬼門を鎮めるということで千葉氏の尊崇を受け、代々の当主の元服に際して、ここに参じて武運長久を祈願していたという。

亥鼻城跡の北の台地下には、「お茶の水」という井戸跡がある。 あくまで「話」であるが、この井戸から汲んだ水で千葉常胤がお茶をたてて、源頼朝に献じたという伝説があり、歴代の城主の産湯にも使ったという。

（参考文献）『千葉氏　鎌倉・南北朝編』千野原靖方（1995）
「中世の千葉～千葉堀内の景観について～」築瀬裕一『千葉いまむかし』No13 ほか

（続く）

# 花咲く松ヶ崎城

今年の桜は多少遅かったのですが、3 月上旬には松ヶ崎城跡が花盛りになりました。 河津桜は台地斜面には 53 本、台地上段にも何本かありますが、それが一斉に咲いたのです。

城の北東側の入口からも、桜の咲いているのが見えます。

植樹して 9 年。 花の数も増えました。

台地中段～斜面の様子。自分が行った時は、車が 7 台とまっていました。

台地上段、土塁のそばにも桜はあり、同じように咲いています。

小さくうつっていますが、家族連れのような人達も。こういう人達が毎年来ています。 昔スコット・マッケンジーが「花のサンフランシスコ」という歌を歌っていましたが、「花の松ヶ崎城」とでもいうような憩いの場になってきたと思います。

## お知らせ

**＜４／２９総会・講演会と当日のお手伝い募集について＞**

４ページで告知しましたように、4 月 29 日（祝・月）10 時半よりアミュゼ柏の音楽室で総会、食休後 13 時半からアミュゼ柏プラザにて「柏飛行場と航空部隊」の講演会を行います。 皆様ご参加お願いします。 また講演会では多数来場が見込まれますが、役員と関係者だけでは当日の対応の手が足らないと思われます。 机、椅子の設置、展示パネル準備、受付など、お手伝い頂ける方はぜひお願いします。

**＜松ヶ崎城跡の倉庫修理＞**

松ヶ崎城跡にある当会のコンテナ倉庫の床が一部破損していましたが、昨年末に修理しました。床の破損の原因は雨漏りで、天井も補修しました。 ロータリークラブから寄贈されてから 8 年以上で、少し痛みが出てきたようです。 修理しましたので、しばらくはもつと思います。

**＜原稿募集＞**

会報、会誌への皆さんの投稿をお待ちしています。 遺跡などの研究ノート、講演会の受講記録、紀行文や写真、イラストでも、地域の歴史、自然に関わることであれば、何でも結構です。Ｅメールの場合は info@matsugasaki jo. net まで。 紙の原稿を役員に託されても結構です。

**手賀沼が海だったころ**
手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報　第 40 号　2019. 3. 31
編集・発行人：森　伸之
年会費 2 千円　振込先：千葉銀行　柏支店　普通　口座番号３４６１４７５